

山々が秋の装いに彩られ、見るものの心を癒やす美しい季節となりました。

今年度は、在校生の皆さんの心を一つにした美しい合唱で式典に花を添えたいという願いから、合唱コンクールが開催される本日、創立記念式典を開催することにいたしました。

あらためまして、本日はお忙しい中、梅津克彦同窓会会長様、石山栄治PIA会長様のご臨席を賜り、山形市立高楯中学校 第七十回 創立記念式典を挙行できますことを大変喜ばしく、また光栄に存じます。心より御礼申し上げます。

さて、ここで本校の歴史を、皆さんとともに紐解いてみましょう。

1947年、昭和二十二年に、日本国憲法が施行され、義務教育の一つとして、全国に中学校ができました。高瀬村には高瀬中学校、楯山村には楯山中学校がそれぞれ誕生しました。この時の高瀬中学校は生徒数264人、楯山中学校は280人だったそうです。両校とも、戦後の混乱期のため、お金や資材が極度に不足しており、校舎を建てることができ

ませんでした。そこで、高瀬小学校、楯山小学校の校舎の一部をお借りし、増築しながら中学校生活をスタートさせました。どちらの学校でも生徒が川原から材料となる玉石や砂利を運んで、校舎の建築を手伝ったそうです。おそらく、勉強どころではなかったことでしょう。

そうした状況の中、「子どもたちのため、高瀬、楯山の二つの村が協力して、独立した中学校校舎を造ろう」という話が持ち上がり、5年後の1952年、昭和二十七年に、高瀬村・楯山村組合立「高瀬中学校」が誕生しました。当時の全校生徒は708人、現在の生徒数の約4・5倍の人数です。しかし、まだ校舎はできあがっておらず、入学式や授業は、それまでと同様に、高瀬小にある東校舎と楯山小にある西校舎に別れて行われていました。念願の新校舎がこの中里の地に完成したのは、その年の12月26日。ようやく、全校生徒が一つの校舎で一緒に勉強することができるようになりましたが、実は、机や椅子などは全てそれまで使っていた古いものを持ち寄り、体育館がないため、第1回目の卒業式

も、第2回目の卒業式も、悪天候の中、長靴を履いてグラウンドで行ったことや、排水が悪いグラウンド整備のために、全校生徒で、高瀬川から砂や砂利を運び、地域住民の皆さんの協力を得ながら、みんなで汗を流し作業に励んだこと、などの苦労話が伝わっています。

それから約三十年後の1984年、昭和59年2月22日に、皆さんが今学んでいるこの校舎と体育館、プールが当時のお金で七億円という巨費を投じて完成しました。

歴史を紐解きながら、当時の先輩方が、物資不足で苦労はしていても、学べることに「喜び」を感じ、学校のために「自分達ができることを考え」、一生懸命に労働奉仕している姿が目に見え、驚かす。「学べる校舎があることが当たり前ではなく、いかに有り難いことか」、その「感謝の思い」が伝わってくるようです。

当時の苦労は想像で推し量ることしかできませんが、皆さんの中には、高楯中学校のよき「校風」が、脈々と受け継がれています。

「校風」とは、学校に流れる、「見えない空気」のことで、言い換えれば、学校の「文化」です。校風は、一朝一夕にできるものではありません。何世代にもわたって、ようやく、その学校その学校の校風ができあがります。

校風を受け継ぐ私たちは、この創立記念式典を機に、何を目指して、どのように取り組んで行けばいいのでしょうか。

勉強や部活動、給食や清掃の日常の活動、仲間と協力をして取り組む行事、進路に向けた受験勉強、何でもいいのです。ただし、「これぐらいでいいか」と、現状に妥協せずに、そして「ひと手間」を惜しまずに、努力や工夫を続けましょう。苦しいことや困難な状況に挑んで、はじめて今の自分を成長させることができます。その全校生徒の精一杯の成長を目指した姿こそ、引き継ぐべき新たな校風となるのだ、と私は思います。

今年度、新学期が始まったばかりの四月三十日の生徒総会では、活発な討議の結果、「繋つなぐく広がる輪仲間と団結し 実行する生徒会」をスローガンに、「あいさつ、思いやり、ボランティア、メディア」

の四つの重点活動を決議しました。「私たちの生徒会は私たちが創る」「より良い学校生活は自分たちが創る」。新しい伝統や校風を創っていくのは、他ならぬ、ここにいる皆さん一人ひとりであり、皆さん一人ひとりの「心意気」や「気概」にかかっているのです。

本日の創立記念式を契機に、高楯中学校の伝統と校風を、夢と希望をもって新たに創っていくことを期待し、また、ご臨席を賜りました皆様方の変わらぬご支援とご協力をお願いし、式辞といたします。

令和三年十一月五日

山形市立高楯中学校 校長 沢口 肇